

# 和良の郷だより

## 移住促進と集落への空家をめぐる

— 和良おこし会議より —

12月7日（金曜日）に「和良おこし会議」を開催しました。今回の議題のひとつは和良町の空き家を活用した移住促進事業についてのご報告を事務局からさせていただきました。

今年度の移住相談は、直接和良に来て、実際に空き家をご案内しながらのご相談を受けた数は、現在までに44件となりました。そのうち10月の和良結まつりで「ふるさと郡上会」と共に設けた移住相談窓口では5件のご相談がありました。また、11月にふるさと郡上会と共同開催した空き家ツアーには7世帯18名の参加がありました。

平成27年度から取り組んで来た活動により、和良おこし協議会を通して和良町へ移住された方は、現在までに24世帯51名となりました。本年度は来年3月に移住が決まっているご家族を含めて、6世帯12名となっています。高齢のご夫婦から、定年帰農を志すご夫妻、赤ちゃんを抱えた若夫婦、子ども達をたくさん連れた家族、単身の若者など移住される方も様々です。都会にはない田舎ならではの付き合いや人間関係、そして冬の厳しい寒さなど、自分の思い描いた田舎暮らしとのギャップに戸惑われる方もあります。目的はいろいろですが「ここにきてよかった」と明るく話していただける方の存在も確実にあります。使い古された言葉ではありますが「住めば都」。この地で気持ちのいい人間関係が築けた方は、和良の郷の暮らしをエンジョイして居られるようです。

また、移住を希望される方にご紹介できる空き家に関して、現在8件の情報をお預かりしています。空き家の状態は、すぐに入居できそうなどころもあれば、ある程度手を入れないと入れない所も多くあります。

新春号  
1月1日号  
和良おこし  
協議会発行



そういった事情で、決して空き家の情報がたくさんあるといったわけではありませんが、引き続きご紹介できる空き家の数を増やしていく必要があります。その為には、今すぐに住める住めないに関わらず空き家の情報提供が必要となります。地域にお住いの皆さんのお力を貸してください。情報をお持ちの方がいましたら、和良おこし協議会までご連絡下さい。よろしく願います。



ふたつめの議題は集落づくりについてです。

今回の会議を開催するにあたり、事前に協議会のメンバーに対し「これまでの和良おこし協議会の活動を通して、培ってきた地域づくりに対しての力を発揮してもらい、今度は地域のリーダーとして、自身が住む地域や和良町の課題解決や地域づくりを進めていくって欲しい」というお話を伝えた上で、それに対してメンバーそれぞれが地域課題などをあげ、どのような手法を用い何ができるのかを考えていただきました。

「地域のリーダーとして」とひとことでも言っても、移住して間もなかったり、積極的に地域づくりに参加できていなかったり、年齢や地域の中での立ち位置なども相まって、個々に自身の中でも課題はある様に見受けられました。しかし、和良おこし協議会として活動してきたこと、勉強してきたことを積極的に地域や集落に伝えて還元して欲しいと思います。

話す中で多く聞かれた声は「地域住民の繋がりが、集まる機会が減っている」という現状があり、これはどこの集落でも似通っているようです。少子高齢化により、これまでの様な集落での活動や維持管理が難しくなっている事は言うまでもなく地域の課題となっています。

多くの集落では、お互いに集まり顔を合わせる人が少なく淋しいという声もあります。もう一度、集落の人が寄り合い、課題を解決するためにはどうしたら良いかを地域の人みんな考えて行きたいものです。そこで次に繋がるヒントやアイデアが出れば、次に向かって行けるのではないのでしょうか？まずは集まってもらうためのイベントや地域に合った催しを練っていく事が必要となります。

協議会メンバーがそれぞれに考えたアイデアをご紹介します。写真を撮る「遺影でYEAH!」、集会所を巡る「ONEDAY居酒屋」、和良を語る「思い出写真展」、地域を見直す「T型集落点検の実施」、地域を巡り話題を共有「皆で一緒に歩こう会」、世代を超えて他出子や既住民も含めた交流「和良の素材でパン作り教室」、「大洞山ピクニック」、「集落営農」で地域ぐるみで住むところを守って行きたい。イベント参加をもとにした地域住民の語り場づくり「和良結まつりに出店」、高齢者を含む各家族の居場所づくり「おでかけサロン」、地域住民の交流「お祭りに出店」など。どれも実現するには難しくないと思います。地域のリーダーとして、ぜひ引率して開催して行っていただきたいと思えます。

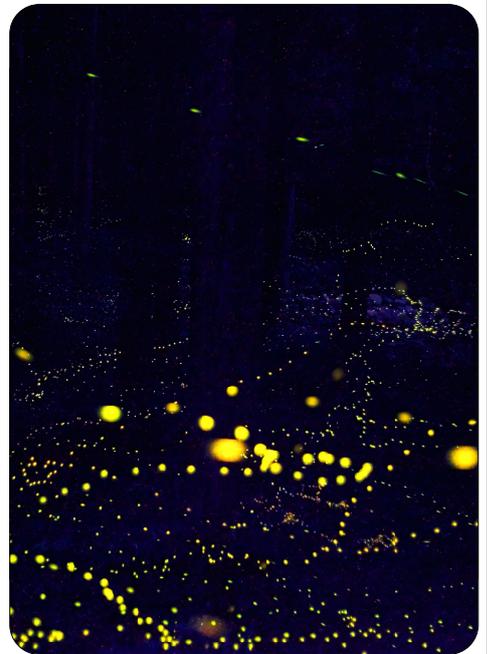
また、和良おこし協議会としては集落づくりを支援する上で、今後どのようなアプローチが可能なのかを考えていきたいと思えます。

生きものの暮らしし人の暮らしし  
—環境を考えることは人の暮らししも守る—



「祖父江の蛍を守る会」

11月17日（土曜日）は、和良蛍を守る会の研修にて「祖父江のホタルを守る会」さんを訪れてお話を伺いました。この日は祖父江の森図書館にて祖父江のホタルを守る会の活動報告などの展示もされており、そちらでの開催となりました。現地では山内会長をはじめ、前会長の渡辺さん、和良町にも縁のある富田さんにお迎えいただきました。これまで15年にわたって活動をされて来た渡辺さんによる、蛍の発生場所や発生数の記録とデータは膨大なものです。ただ、これを「悲しい記録です。」と山内さんは語られました。祖父江に発生する蛍は「ヘイケボタル」です。現在までにその発生箇所や発生数は激減してきており、状況は危機的な状況になってきている様です。その推移が記録されてきたこともあり、悲しい記録と話されました。昭和の頃から、農業や用水路の整備など地盤整理、農地改革によってその時代時代に環境に変化がもたらされてきました。決して農業は環境にとって良いものとは言えませんが、これまでは農協さんによる管理がされて来たものの、現在はホームセンターや通販などで、農薬や除草剤が、個人でも簡単に手にはいり使用出来るようになりました。耕作されなくなった農地で、草刈りが大変だと簡単に除草剤を使用してしまいう方もあります。田んぼの畦や近くの場所にもいとも簡単に使用して手間を省こうとする様な事もあります。はたして作物や環境に影響はないのでしょうか？いえ影響はあるはずで、生きものが住むところには人の暮らしもあります。生きものが住めないような場所に果たして人は暮らし



続ける事が可能でしょうか？人は暮らしやすさや便利さを求め環境を変え続けてきました。その結果、里に住む蛍やトンボ、カエルなどの生きものだけではなく、人も減っているのです。日本中で人口減少に関する問題も多く取り上げられていますが、その一端は人にあるのでは・・・

最近では「地球にやさしく」と言ったフレーズを見聞きすることも多くあります。しかし、本当のやさしさはどこにあるのか？私たちはこれからどうしていくべきなのか？大昔の様な生活に戻ることや戻すことは難しいですが、問題や課題をもう一度ちゃんと考えることは必要だと思います。

環境の変化は蛍からも知ることが出来ます。祖父江のホタルを守る会さんや和良蛍を守る会によって情報が収集がされています。その情報を元に環境を守って行くのは、そこに住む人に他なりません。環境の受けたダメージを回復する努力は相当なものでしょうが、まずは我々ひとりひとりが、少しでも環境を意識して生活する事を最初の一步として始めてみませんか？



「良い川って何？和良川の秘密のお話。」  
11月23日（金曜日・祝）は、町民センターにて、岐阜大学地域科学部向井貴彦先生をお迎えしての講演会と、和良川を守る会会長の大澤克幸氏とのトークセッションが行われました。和良川を守る会会長の大澤克幸氏からは、和良川を中心とした和良川に居る、「ゴトチ」、「アジメドジョウ」、「アマゴ」、「ウナギ」などの動画も交えて、獲って食べる事などにも関わってお話を聞くことが出来ました。

向井先生からは「水は命の源」であり、山間地、都心部共に昔からそこに流れる川が、人々の暮らしに恩恵を与えてきた。川は常に流れており、流れには周囲の環境が大きく影響を及ぼす事、中でも人里を流れる環境は重要で人の暮らしにも大きく影響を与えている。川にはる過作用があつて、これには当然、田んぼや山林など各箇所からの浸透も含まれるが、川のろ過作用を超えたダメージもないとは言えない。

良い川とは、「みんなが楽しめる川」。生きものが多く水質の良さがあげられるが、ある個体だけが突出している事も良くないし、思い込みだけで川を判断する事も良くない。環境の悪化はすぐには見えてこない。といったお話がなされました。  
人の生活が環境に大きなダメージを与えてしまっている事はないだろうか？各々考えてみよう。

和良町の人口 平成30年12月1日現在

